

政治漫画の内容分析

—有事関連法案報道にみる—

茨木 正治

- I 問題の所在
- II 「有事関連法案」報道と「政治漫画」
- III 結論と課題

I 問題の所在

本論文は、拙著（茨木、一九九七）で提示した「政治漫画」研究のその後の展開で見られた諸研究（「現実構成論」「フレーミング研究」「象徴的収斂理論」）の知見を踏まえて、事例研究を行ない、「政治漫画」の意義を再検討するものである。

新聞掲載を主とした一齣漫画である「政治漫画」は、風刺と啓蒙（娯楽と解説）の機能があることは知られていた。その反面、「政治漫画」への関心の薄さの要因として、こうした機能を繋ぐ「読み方」（「文法」）の欠落という内在的要因と、新聞メディアが置かれている環境の変化という外在的要因があった。

こうした環境にもかかわらず、拙著で提示した意義は、次の三点であった。

1 「政治漫画」の伝達と風刺・娯楽の中にシンボル機能（喚起と凝集）を見だし、対象となる政治現象に隠蔽されているシンボル機能を明らかにする。

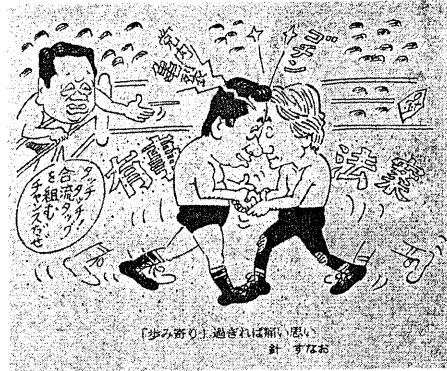
2 画像の簡便性と文字の複雑性とを兼ね備えたメディアであることで画像志向に適応できる。

3 現実構成力をもつメディアであることによる多様とされる現代社会を読み解く。

本論文では、この中の2と3を検証する。すなわち、文字と画像複合メディアとしての「政治漫画」が、どのように現実を構成するかを事例をもとに政治漫画の内容を分析することで明らかにする。複合メディアの機能を、「政治漫画」と「政治漫画」外的情報（「記事」「論説」「投書」からなる文字情報）の相互作用から構成されるとし、それに基づいて「有事法制」に関わる報道の分析を行う。

分析及び理論枠組みとして、「政治漫画」研究から「文法」（「読み方」）をレトリックに求めたメドハストたちの研究（Medhurst & Desousa, 1981）をもとにし、理論的背景として、「現実構成論」と情報処理論の認識の考察と、新聞・テレビの社会学的研究から構築された認知枠（フレーム）を探る、「フレーミング研究」、集団理論から、人々の意識の集合に非リアルな言説（imaginative language）が「凝集」と「喚起」を通じてまとまった認識や態度の「世界」を作り上げるとする「象徴的収斂理論」（Symbolic Convergence Theory）を援用する。マス・コミュニケーション論における「政治漫画」理論的背景を（表1）のようにまとめた。現在の研究は、従来の「受け手研究」から、送り手研究との接合を含んだ理論に拡大してきた。この「受け手研究」と「送り手研究」を組み合わせることが可能な、「周縁的」

研究のもつ可塑性を重視して、「文字情報」と「政治漫画」のそれぞれが作り上げる「ファンタジー・テーマ」（本論では、「リアル」領域に拡張して使う）とそれらの相互作用を読み解くことを求めた。



（図1）'03-5-14（朝日新聞）針すなお作

II 「有事関連法案」報道と「政治漫画」

（1）第一五六国会と有事関連法案

二〇〇三年一月二〇日に召集され、四〇日間の会期延長を経て、同年七月二八日に閉幕した、第一五六国会は、争点として、個人情報保護法案（五月二三日可決成立）と並んで有事関連法案が懸案であった。二〇〇二年四月に閣議で決定され、国会に提出され継続審議となっていた有事関連法案は、三月のイラク攻撃、昨年より続く北朝

鮮拉致家族問題を背景にして、政府与党と野党第一党である民主党との間で、四月に実務レベルでの交渉が進展し、五月には党首レベルの合意が成立した。その結果、成立に向けて急速に進み、五月一五日に衆院本会議で九割近くの議員の賛成により可決し、六月六日に参院でも採択され可決成立した。

有事関連法案（有事三法、有事法制）とは、外国からの武力攻撃を受けたときの政府の対応を定めた武力攻撃事態対処法案、有事の際自衛隊が円滑に行動できるように、自衛隊法と関係法とを改正する自衛隊法改正案（たとえば、民間の土地使用の手続きの簡素化や、物資保管命令違反の民間人への罰則を規定している）、有事における政府の安全保障会議の役割強化を目的とする安全保障会議設置法改正案からなっている。

（2）分析目的

政治漫画に表象されているテーマの背景にあるレトリックを明らかにするとともに、記事や論説・投書の分析（フレーム抽出）を通じて政治漫画が構成する非リアルな表象がファンタジー言説となつてどのように新聞メディアの中で拡大されていくかを概観することを目的とした。

（3）分析方法

1 政治漫画の内容分析——テーマの分析、シンボルの分析、相互作用

一五六国会に登場した政治漫画のうち、有事関連法案をテーマとしているもの（『朝日新聞』掲載）を内容分析し、抽出された下位テーマおよび属性テーマとレトリックとの関連を、扱ったテーマの考察だけでなく、漫画上の諸要素（シンボル、文字、背景描写、見出しなど）との関連をすることによって、シンボライズされたものの意味を考

えた。さらに、シンボル間の相互作用を考察した。理解の補助として他紙（『読売新聞』、『毎日新聞』）の政治漫画の分析も行った。

2 文字情報と政治漫画との関連——ファンタジー・テーマの構成・展開

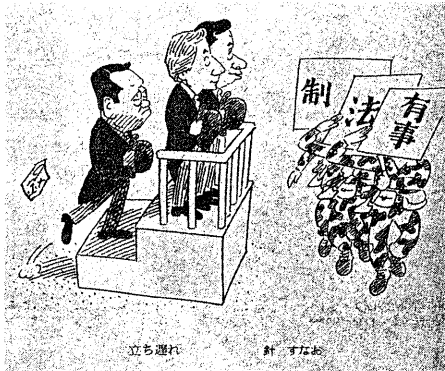
有事関連法案に関する政治漫画が登場した五月一日および六月六日前後の新聞記事（『朝日新聞』統合版・東京最終版）から、有事関連記事を抽出し見出しをまとめた（表2）。さらに、同期間を基準に新聞社説と論調・コラム（『天声人語』）および投書（『声』・その他（『かたえくぼ』）から有事関連法案に関するものを取り出して整理した（表3、表4）。このとき、見出しのないもの（とくに『天声人語』）は観察者が要約したものを添付した。また、投書においては、政治漫画や記事の後に登場することが多いので、分析対象とする期間をテーマの初出から、最終までに拡大して抽出した。こうして抽出した記事・論説、投書について見出しを手掛かりに、内容を分析しそこに使われているフレームを抜き出そうとした。このときの抽出基準は観察者の判断によった。なお、政治漫画の説明に際して、登場人物の役職は、一五六国会当時（第一次小泉内閣）のものをを用いた。

（4）分析結果と考察

1 政治漫画の内容分析——テーマの分析、シンボルの分析、相互作用

1. 「朝日」掲載の政治漫画分析

有事関連法案に関する政治漫画は、表のように、「朝日」三枚、「毎日」四枚、「読売」五枚の計一二枚であった。¹これらは、有事関連法案が衆院と参院をそれぞれ通過する時にほぼ対応して掲載されており、内容もそれをテーマとするものであった。²有事関連法案は内容の認知度とはうらはらにひとつの具体的な「できごと」として政治漫画



(図2) '03-5-15 (朝日新聞) 針すなお作

では認識されていたことがわかる。すなわち、法案の成立までの過程に政治漫画が描かれ、国会会期全体に渡ってテーマとして描かれるほどの抽象的な扱いはされていないのである。⁽³⁾

ここで三枚の政治漫画を個別に、その修辞技法と扱われるテーマに着目して、当該政治漫画を「読む」ことにする。まず、「朝日」(03/5/14)は「有事法案」というプロレスのリングで握手をしようと互いに歩み寄る菅と小泉の両党首が、相手との距離を測りかねて頭をぶつけている(図1)。有事法案について五月一三日に与野党で修正合意がなされた(03/5/14^①)ことを受けての政治漫画である。相互の歩み寄りが過ぎて衝突したとき、民主側に生じた「党内亀裂」は、旧社会党系と旧自由党系のいわば民主党内の「左派」「右派」がそれぞれこの「合意」に難色を示していたことによる。「法案修正合意」と「党内調整」といったテーマのほかに、タッグパートナーとして小沢自由党党首が、タッチを求めている姿が描かれている。これは、民主と自由の合流問題を示唆しており、自由党は乗り

気だが民主党は「(有事法案) 修正協議後に先送り」の態度を既に示していたことを描いている。⁽⁴⁾

この「政治漫画」は、「有事法案修正協議」と「民主党・自由党の合流問題」をテーマとして構成されているとみなす根拠として、以下の点が上げられる。

主題発見の手掛かりとして(図1)の政治漫画に用いられているのは、「文(的)事象」による示唆である。プロレス、相撲、ボクシングなどの格闘技は、与野党の政策対立、討論の際によく用いられる。一対一の対決が与野党の対決を想起させるからである。加えて「個人の特徴」を似顔の援用によって人物特定化に役立たせ、小泉・菅・小沢といったよく知られている政治家に似せることによって読み手に政治テーマの喚起を狙う。⁽⁵⁾

ところで、この「文化的示唆」としてのプロセスがなぜ「合意」のテーマを描くことに用いられたのであろうか。ここにもうひとつの修辞技法である「対照」が見えてくる。この技法は読み手の印象を描き手の意図する方向に向かわせるという「意向」の一形態である。ここでは、対照的な事物現象の役割をプロセスという格闘技の中の「握手」と「頭の衝突」（「頭突き」ではなく）に担わせている。本来は有事法案に関する十分な意見のやりとりを個々の法案の項目ごとに、特に国民の安全と人権の保障について——あるいはなぜ今急に有事法制か、有事とはそもそも何かといったラジカルな次元から——異なっている与野党の見解を付き合わせていく必要があった。それが、与野党の党首「対決」の意図するところであった。ところが、「党内亀裂」をものともせず、民主党が性急に歩み寄っていたことから感じられる不思議さをこの政治漫画は表わそうとしている。政治日程、対米交渉の文脈で与党・自民党側からも今国会で有事関連法案の成立を望む意識があったとはいえ、見出しに「歩み寄り」過ぎれば痛い思いと付されるほどの「性急さ」を表すことが、「対決」という姿勢の中に潜む「与野党合意」を明らかにするためであったとみられる。

次に「朝日」（03/5/15）「立ち遅れ」（図2）をみると、自衛隊の観兵式の壇上に小泉首相と菅代表とがにこやかに並んで立つており、行進している迷彩服を着た「有事法制」が行う敬礼に帽子を取って挨拶している。その壇の階段途中に小沢自由党党首が加わろうとしている。彼らは正装して、有事法制を出迎えている。有事法制は民主・自民の合意を経て、この漫画が掲載された日に衆院で可決されている（03/5/16①）。また、自由党は民主党との合流のため、有事法案への賛成の意思表示をした（03/5/15⑤）。こうした経緯から、前日「対立」状態があった政治漫画の構図が大きく転換し、笑顔で壇上並んでいる小泉・菅両氏の姿を描き、不満をもちつつも合併のためには賛意を示さざるを得ない小沢氏の姿を表現しているのである。

用いられているレトリックからこの政治漫画を読むと、「創案」としての「主題設定」を導く「文化的示唆」のレ



(図3) '03-6-7 (朝日新聞)
針すなお作

トリックは、具体的には「儀式」である。軍事の中の儀礼としての「観兵式」は、この儀礼的行動が意味を持つ。すなわち、前述したように、厳密にはこの漫画が掲載された時点では、衆院を有事関連法案は通過していない。しかし、民主・自由両党の賛成により衆院の可決は必至である。したがって、もはや有事法案は——少なくとも衆院においては——、「儀式」の「式次第」と同じように結果の明白な（行動内容の明白な）未来の行為として表現されている。

また、儀礼的行為と儀式は、この場合それ自体が、既存秩序の確認の意味をもち、秩序の安定を表現する。与野党二大勢力の政策合意がそれを生じせしめ、その意味でこの画像はステイックなものであるはずである。が、若干ダイナミックな側面も残している。それは、小沢自由党の「不満」に描かれている（「不満」による。これは、「意向」における「対照」の技法が小沢氏と管・小泉両氏の間に描かれていることから見いだすことができる。具体的には、「表現形式」によって反映されている。「顔の表情」が、小泉・管両氏では「笑顔」であるのに対し、小沢氏は「渋面」である。また、画像内の人物や事物の動きに見られる「モニタージュ」においても、壇上に上ろうとする小沢氏とすでに並んで立っている管・小泉両氏とは、「動」と「静」の対比が生じている。さらに、人物の「位置関係」においても、端から中央へ移動しようとする小沢氏と既に中央近くにいる管・小泉両氏との間に「不安定」と「安定」の対照がみられる。こうした「動き」を描こうとする描き手の意図は、「立ち遅れ」という見出しにも反映されている。つまり、「有事法制」と「民主・自由の合流」という二つのテーマに重要度の差異をつけた昨日の政治漫画（「朝日」(03/5/14)）

(図1)とは異なり、儀式という「安定」したテーマに残る「予定不調和」の部分、「不満足」の部分を描こうとしたのではないかと見られる。背景となる政治的事実は上述したが、それにとどまらず、読者がもつ「有事法制衆院通過」というできごとについての、さらにいえば「有事法制」そのものについての、いわく言いがたしという気分というものを小沢氏の描写を借りて表現したかったのではないだろうか。

二〇〇三年六月六日、有事関連法案が参院を通過し、成立した。「政治漫画」(朝日 03/6/7)では、「有事3法」と称された軍用機から小泉首相が、「国民保護法制」のパラシュートを落としている。一年以内を目標に「国民保護法制」を整備するという条件つきで有事法制が成立したことを受けて描かれている。パラシュートが落下するその場所には、富士山と爆撃を受けている都市(バグダッドか?)を背景にある地球上に、右足負傷の男が受け取ろうとしている。この政治漫画は、「有事3法成立 戦時体制整備現憲法下で 国民保護は先送り」(03/6/7①)、「後回しの構図 また 有事3法が成立」(03/6/7③)を背景としている。有事法制の成立とその瑕疵がテーマとなっている。登場する人物は迷彩服の小泉首相という特定化された人物と、特定化されない男性の二人である。特定化されない(匿名の)人物は国民・市民・庶民など一般の人々を指すことが多い。この場合も、「国民保護法制」との関連で国民であることがわかる。

この政治漫画に用いられたレトリックは、「創案」としての軍用機、パラシュート、迷彩服などから有事体制、軍事を想起させる。より直接的だが、攻撃されて煙が出ている都市が背景にあることも、戦時を想起させる。ここでは「パラシュート」に着目すべきである。高所(地平線が曲線になっていることに注意)を高速で飛行する軍用機から「ゆっくりフワフワ」(見出しから)と落下するパラシュートは、「意向」としての「対照」のレトリックがみられる。高速で進行する「有事3法」に対してあまりに対照的なゆっくり「落ちてくる」「国民保護法制」は、はたして「1年以内」に落ちてくるのかも疑わしいようにみえる。こうなると「対照」というよりも非難・共感などの

同一の感情をよりはつきりと喚起させるための「矛盾対立」のレトリックが用いられているとみることができよう。けがをした国民を置いて「有事3法」はどこにいくのかを感じさせる政治漫画でもある。

また、「表現形式」における「対象の位置関係」「対象の相対的な大きさ」「使用する線の太さ・濃淡」などの手法が、こうした読み手の感情の喚起と明確化を裏付ける。この漫画の前景は「パラシュート」「戦闘機」とそれに乗っている小泉首相である（左欄外に向かって消えていくことが予想される「モンタージュ」が合わせて使われている）。これらは画面に大きくハッキリした太い描線で描かれている。これに対して右足骨折の男（「国民」）は、画像下部位置し、比較的小さく濃淡も薄く細い描線で描かれている。しかも、「国民保護法制」というパラシュートを「上」から受け取るというきわめて受動的な存在として——「丁寧に右足を負傷して——描かれている。あつという間に有事法制が成立し、「客体」の国民はその過程においてなすすべもなく、また法案内容においても単なる「客体」にすぎないことが想起されるのである。^⑧

以上「朝日」に掲載された「有事関連法案」に関する政治漫画をみてきた。「文化的な示唆」を用いて「創案」を企画し、その際には読み手の大多数が認識できる（想起できる）シンボルを用いて、シンボル化された出来事（テーマ）を伝えようとしていた。こうしたレトリックは誰もが認識しやすいことを狙うためステレオタイプに走りやすい。それゆえ、表現内容の平板化の危険がある。しかしながら、こうした欠点を補うべく、「対照」や「矛盾対立」の手法と組み合わせ、より複雑な画像構成を図っている。^⑨ここから読み取れる「有事法制」は、その過程における与野党の「歴史的」な合意と与野党主要勢力以外の民主政治におけるアクターの疎外状況であった。「有事関連法案」の具体的個別的な内容あるいは与野党合意の具体的な箇所よりも、合意そのものや法案成立の経緯に重点を置いた構成を政治漫画が重視していたことが明らかになった。

2. 「三大紙」の政治漫画比較

「有事関連法案」を描いた政治漫画は総じて前述したような傾向をもっていたのであろうか。「朝日」の政治漫画をもとに、「毎日」および「読売」のそれとを比較する。「毎日」や「読売」も「有事法案」の衆院通過と参院通過（成立）の二つの時期を中心に掲載されている。そこで、法案の「衆院通過」期と「参院通過」期に分けて比較を試みた。¹⁰

〈衆院通過期〉

まず、「衆院通過」期では、与野党の修正合意による可決が「三大紙」いずれの政治漫画でもテーマとなった。異なるのは、付属する（並列する）テーマである。上述したように、「朝日」は「有事法案」とあわせて「自由党、民主党の合併」をサブ・テーマとして漫画を構成している。「毎日」では、それぞれ「民主党内の争い」（「毎日」03/5/9）、「修正・合意の内容」（「毎日」03/5/13）「対米関係」（「毎日」03/5/16）がテーマとして「有事関連法案」と組み合わされている。また、「読売」は、「自由党、民主党の合併」（「読売」03/5/8）、「読売」03/5/15、「合意における修正」（「読売」03/5/14）「社民・共産党と法案通過」（「読売」03/5/16）を「有事関連法案」と当該法案の衆院通過のテーマと接合させている。「朝日」と「読売」の違いはあまり見られず、むしろ「毎日」との相違のほうが、この「サブ・テーマ」に関しては顕著にみえる。しかしながら、以下の点からみると「三大紙」における「有事法案」への態度の差を見いだすことができる。すなわち、小泉首相と菅民主党党首との関係や野党党首との関係のような、画像内のシンボルや人物の相互関係といった点に各紙の相違を見出すことができる。

「朝日」は、既に述べたように、「対立」の関係を「文化的示唆」で示しつつも同時に「合意」による協調をギクシャクしながら提示し、直後の政治漫画ではにこやかに振舞う小泉―菅関係を描写している。これに対して、「毎日」は、「有事関連法案」を最初にテーマとして扱った漫画は、「ボクシング」の赤青両コーナーから戦いに出ようとする

小泉・管両氏を描いている(「毎日」03/5/9)。しかし、これは、修正協議途中の五月九日に掲載されているので、「朝日」より前に民主・自民の「対決」姿勢は失われていることを「毎日」では示唆していることになる。人物間の関係をもても、初出の作品(「毎日」03/5/9)を除き、他の二枚はともに小泉首相主導で描かれている。政治漫画の「主役」に首相がくることは珍しいことではないが、必ずしも行為「主体」となるわけではない。「毎日」のこの二枚(「毎日」03/5/13) (「毎日」03/5/16)は、「朝日」に比べて「有事法制」に積極的な政府与党の姿勢がみてとれる。ところで、シンボルとして登場人物がどのような含意を持つかに着目すれば、「朝日」と「毎日」ではそれほど差はない。「朝日」の小沢自由党党首が抱いた「不安」「懸念」を、「毎日」では小泉首相の相方を務めた管氏が「笑顔を見せない」「視線を(小泉氏に)合わせない」ことから役割を演じているとみることができるところである。「対照」のレトリックを使い、「小沢―管・小泉」の対応を「管―小泉」に置き換えたとみなせば、作者ならびに読者の「懸念」を小沢氏の代わりに管氏に担わせているといってもよい。しかしそうであったとしても、「朝日」の管氏の「笑顔」(「朝日」03/5/15)と「毎日」の政治漫画とを同じものとすることはできない。すなわち、野党のマジョリティーが与党と政策で合意した以上の意味を、この「朝日」の「笑顔」はもっていると考えられる。つまり、読者国民を含んだマジョリティーが法案そのものについて「存在やむなし」という認識をもっていると政治漫画がみなしたことを「朝日」における管民主党代表の「笑顔」は語っているのではないだろうか。

「朝日」と「毎日」のシンボル間の特徴に比べて、「読売」の政治漫画では、与野党の「対決」シーンはすでに眼中にはない。「合意」の状況を描写する(「読売」03/5/14)とともに、衆院通過時の民主・自由の模様を描くこと(「読売」03/5/15)で両党の「合併問題」をそれとなく示唆することに主眼を置いている。「民主・自由の合併問題」をサブ・テーマとしたことで「朝日」の政治漫画と類似している。また、「修正」をめぐる描写では、民主(管)と自民(小泉)が「有事法案」という書籍を互いに持ち合っている。ここには、「毎日」にみられた両者の優位差は

みられない。むしろ、書籍に挟み込んだ文書（具体的修正箇所として、「基本的人権の尊重の明文化」と「対抗措置終了時を国会が決めるという国会の関与」の二つが想像される）が管代表のほうを向いていることから、民主党の意向が反映された「修正」であつたという読み取りが可能なのであつた。管・小泉両氏がつけている腕章にはそれぞれ「市民」、「国」の名前がついている。それぞれが、当該集団の代表であることを示している。¹¹

「読売」では、衆院法案通過に関して二日にわたつて各党の反応を描いている。ここでは、野党でも社民党や共産党の対応にも視線を投げかけている。法案衆院通過当日（読売 03/5/15）では、「参院行」の「有事関連法修正案」のバスに乗車（賛成）した各党の姿と、法案に「賛成」を示した自由党の小沢氏が乗り込む姿を描いている。いわゆる法案過程の中心となる集団の事情を絵解きにしたものである。これに対して、翌日の政治漫画は、「衆院」バス停で立っている、土井社民党党首と志位共産党委員長の前を横路孝弘民主党議員が乗った「参院行修正有事法案」のバスが通過していく模様を描いている（読売 03/5/16）。旧社会党系で現在民主党員である横路氏は、民主党内の造反議員の説得に回つて「有事関連法案」の衆院通過に寄与した。こうした「状況の変化」を土井氏と車中の横路氏との間に生ずる「沈黙」の「漫符」は表わしている。この政治漫画は前日の漫画とセットになつていて、法案通過の明暗を対照的に、かつ一六日の政治漫画ではより細部の対照を描いているという「入れ子構造」になつている。¹² こうした政治漫画どうしの連続性によつて一種の連続コマ漫画の働きをも有しているところに、政治漫画の一齣漫画としての汎用性がうかがえる。

〈参院通過期〉

六月六日、参院本会議にて「有事関連法案」が賛成二〇二反対三二と圧倒的多数で可決成立した。「国民保護法制」は先送りされた。この「国民保護法制」を（サブ）・テーマとしたのが「朝日」（03/6/7）と「読売」（03/6/7）である。「読売」は、野原で「国民保護法制」の傘を修理している小泉首相のうしろに「有事関連3法」の傘をさして

すわる石破(いしば)防衛庁長官がいる。後景に菅民主党首がいらだって何かをしゃべっている。その上には黒雲が立ち込めて、小泉・石破両氏のところに迫りつつある。民主党が妥協案として力説した「国民保護法制」の確立を「急いで！」行いう姿が、描かれている。「国民保護法制」に対する「朝日」と「読売」の扱い方が対照的である。「二年以内」(こうした文字は画像内にはないが)という誓約に忠実なのが「読売」で、とてもそうはみえない(パラシュートでフワフワと落ちてくる)のが「朝日」である。これは、明らかに政府よりの視点と国民よりの視点との違いからきている。「読売」の政治漫画では、「修正協議」のときにも小泉首相の顔には笑みがなかった。こうした視点の違いが「国民保護法制」への政府の姿勢への見方に影響を与えていると見られる。

「国民保護法制」という「有事法制」問題にとつては下位範疇ではあるが、当該法制の内部に争点が残されたと見ているのが「朝日」と「読売」の政治漫画であつた。⁴⁾「有事関連三法案」はすでに解決済みとして、そこから派生した問題(「イラク派遣法」)に関心を移行させているのが「毎日」(03/06)である。国会議事堂を背景に、「有事関連法案」のロゴを背につけた自衛隊員が小泉首相の横を「通過」する。何かほかに待っているのかという自衛隊員の問いに、小泉首相が「イラク新法」を想像して「次を待ってる」と答えている。もはや「有事関連法」は政府与党(少なくとも小泉首相)の頭の中からは全く存在していない。「朝日」や「読売」が懸念する「国民保護法制」という留保はなされていない。掲載日の関係から、法案成立の当日となつてリアルな情報が入手できないというハルデを逆に利用した政治漫画である。「朝日」や「読売」は、その立場の違いはあれ、「有事関連法案」を成立後も検討課題とみなすべきであるという主張を直接的に表現している。これは「直接的」でわかりやすいが、反面「有事法制」そのものを認め、部分的な問題を争点としようとすることになりやすい。これに対して、「毎日」は文字部分の多さが若干煩雑さを感じさせるとはいえ、政府与党は、野党の修正点すら実は問題にせず、始めに法案通過ありきであつたのではないかという疑いを読み手に生じさせる効果をもっている。「国民保護法制」や「基本的人権の

尊重」といった問題を敢えて表現せずに、より原則的な問題提起に読み手をいざなうことが可能であろう。「パラシユート」は時間にかかるが落ちてくる確率が高い。しかし、画像に出てこないものは、いつまでたっても国民のものには落ちてこないのである。

2 記事・論説・「投書」と政治漫画（「朝日」にみる）

政治漫画が「有事関連法案」を扱った日の前後の「記事」、「論説」、「投書」は、政治漫画との何らかの関係を持っていると考えられる。メドハストラのレトリックに即して言えば「所作」（表象の周縁の環境との相互作用——演説における身振り、発話の場所、発話者本人の言語能力などから類推して構築される——）を拡張した、「政治漫画外的情報」としての文字情報と政治漫画との関係に対応する。主題の設定や意図への誘導に掲載日ないしそれ以前の文字情報が用いられることが推測できる。加えて、コミュニケーション要素のひとつとして政治漫画をとらえれば、政治漫画が提示したテーマや「主題」（意図）が、新聞の論説や読者の投稿と関連が生まれることも考えられる。「有事関連法案」の政治漫画の場合、衆参両院での採決前後に掲載が集中しているので、この二つの時期を軸にして、その前後の期間の「有事関連法案（有事法制）」に関する「記事」（「特集」「解説」を含む）、「論説」（「社説」「コラム」、記名入り論説）、「投書」を抽出し、その傾向と政治漫画との関連を探った。なお、資料入手の都合上、大阪統合版の「朝日」の「記事」「論説」「投書」に限定した。

1. 「記事」

「記事」については、「衆院通過」時期には、五月二二日二面を初出として、五月二二日五面の記事に至るまで三件、「参院通過」時期には、六月六日一面を皮切りに六月七日三九面までの一四件、計四七件掲載されている。前

半の衆院通過時には一日あたり三・二件、後半の法案成立期には、一日に七件であるが、前半の五月二一日の記事は、衆院通過後の「参院特別委員会」設置の記事であるから、実質は前半も五月一七日までの六日間であり、一日あたり五・四件となり、それほどの差はない。¹⁵⁾なお、前半部分は五月一五日(二・三件)、五月一六日(九件)に集中している。衆院採決日とその翌日に焦点が当てられている(表)。

「論説」は、「社説」五件、「記名論説」四件、「コラム」(「天声人語」)四件、計一三件掲載されている。初出は五月一二日の「社説」で有事法制に関して「独り歩きさせぬために」という見出しがつけられている。ここから衆院通過時の後の一七日まで毎日「論説」は掲載されている。重要法案に対する意思表示とみられる。最後は、六月八日の「社説」であり、六日から連続して「コラム」「記名論説」「社説」の順に連続して載せている。

「投書」では、衆院通過時では、五月一四日の投書が最初で、二二日まで一五件掲載されている。一日あたり約一・六件と掲載のない日を考慮すれば、一日に二件近くは「有事法制」に関する「投書」が掲載されている。法案成立時には、直後には「休刊日」の関係(六月八日)¹⁶⁾からか、成立した日(六日)直後には「投書」は見当たらず、初出は六月一日と五日もたつてからである。ところが、この日を発端として六月二九日までほぼ連続して総数二九件もの「投書」が「声」の欄に登場している。法案成立という出来事に対する評価は、知覚・認知・態度という個人の心理過程と同じく、事後に表われるものではあるとはいえず、衆院通過時と比べてきわめて特徴的である。

「記事」「論説」「投書」が、「有事関連法案」についてどのような「現実」を構成したのであろうか。

「記事」では、「衆院通過」時までは大きく四つの「テーマ」を重視している。すなわち、「修正案の内容」、「合意までの民主党の姿勢」「衆院通過の状況、様々な領域の反応、法制適応のシミュレーション」「参院審議の展望」である。

第一に、法案修正と与野党合意について、民主党が唱える主張(「緊急事態対処基本法」とその中に盛り込まれた

「危機管理庁」の設置が焦点であるとし、さらに直前では「基本的人権の保障」規定を重視した「記事」を掲載している。結果として、前者の「基本法」と「管理庁」の設置は、検討事項とされ、後者の「基本的人権」の保障についても「最大限に尊重」と「武力攻撃事態対処法」内に文言が加えられただけにとどまった。それを鑑みると、民主党の「修正」をそれなりには評価している傾向にあるといえる。

第二に、民主党の政治姿勢について、戦後安全保障論についての野党第一党として、著しい政策転換があったことについて、戦後史を概観して言及している。それに合わせて政策合意までの「裏話」を、自民・民主の有事法制特別委員会理事の行動をたどることでドキュメント仕立てにしている。

第三には、「衆院通過」にまつわる反応、特集、シミュレーション、素通りされた論点など、衆院通過の現象を軸にして構成したときに浮かび上がる「テーマ」である。

第四には、「有事関連法案」の参院審議に關しての争点展望や、特別委員会設置の「記事」が該当する。すでに「基本法」に民主と自民との間に温度差があることを指摘している。

総じて、この時期の「記事」は、社会面で問題点や懸念すべき点、当事者となる国民の反応を描き、政治面では法案通過までの過程を淡々と辿ってバランスをとっているようにみえる。また、政治面においても、詳細な点に注目すれば、「国民保護法制」の検討が盛り込まれたことを議論の継続すべき論点として強調している。これは「出席議員の9割賛成」という「異常な状況」を語ることとの均衡をはかっているとみせる。

「参院通過・法案成立」期には、構成はほぼ同じである。「法案成立時の状況」「自治体・メディアその他各領域の反応」「法案内容の解説」の四つについては、構造上は「衆院通過」時期と大差はない。ただし、内容において若干の違いがある。「衆院通過」時には、自治体への影響が重視され、知事へのアンケート結果を示し、「法整備は賛成、国民（住民）保護法制の不備懸念」といった意向を導き、「国民保護法制の整備」という主張の「後方支援」と

していた。これに対し、「法案」成立期には、「特集」を充実させ、有事法制論としてその評価と課題・影響を六人の識者に語らせ、社会面で二人、計八人に語らせている。大雑把にこのコメントをまとめれば、直接的な批判は社会面の二人であり、他の六人は「有事法制」成立賛成と反対を半々にしている。反対の中でも地方を重視することを主張する傾向が強く、「総論Ⅱ法整備そのもの」については反対とは言いがたい論が多い。ここから、「有事法制」そのものの議論は終わったとは必ずしも断定してはいないけれども、そうした「ラジカル」な議論は多数派ではないという認識が紙面の背後にあるのではないかと推測ができる。この指摘の根拠として、次の点を補足したい。

「戸惑い尽きぬ有事法制」(6(6,29))、「有事3法成立 戦時体制整備、現憲法下で 国民保護は先送り」(6(7①))、「後回しの構図また あいまいな適用基準 「対症療法」でつぎはぎ 目先の利益 大粹見えず」(6(7③))などの「記事」の姿勢とは「コメント」が対応していない。「論説」自体直接的な主張でありよりインパクトのある紙面になっていると見ることも確かに可能であろう。しかし、問題とすべきは、「記事」のような一見「リアル」な言説の中に見られる「ファンタジー」である。どのような「ファンタジー」が取り入れられ、また排除されたのか、読者の認識や態度の反映かつ影響と大いに関連すると思われるからである。

(表2) 「有事」関連記事

5・12② 「基本法」「管理庁」焦点に

有事法制与野党協議 山場へ

決着めざし幹事長級会談

5・13② 有事法案

あす採決を確認

与党 きょう民主と最終調整

5・14 ①

有事法制 今国会成立へ

修正協議 与党と民主が合意

「人権保障」を明記

②

日本の安保論、曲がり角

野党第1党、「積極」に転換

③

「時時刻刻」自・民、シナリオ周到 有事法案修正合意

「落としどころ」探る

「左」と「右」、説得は分業

小泉人気も妥協後押し

③

「日本政治史に画期的なこと」首相

②⑥

論点素通り不安の波 有事3法案成立見通し

後方支援 社命で参加「拒否できぬ」

土地提供 地主への通知「余裕ない」

米軍支援 最悪事態「あいまい困る」

5・15 ①

「政府の説明不十分」8割 有事法制知事アンケート

法整備は8割賛成

保護法製 先送り、半数が不満

- ① 有事法制きよう衆院通過
- ② 中国は抑制的な反応 北朝鮮核で一定の理解
- ② 韓国政府関係者「憂慮言える状況でない」
- ② 米専門家は一定の評価
- ③ 「低いハードル 浅い議論」 有事法制案衆院通過へ
「人権」今後の歯止めに
- 自衛隊法議論深まらず
- ③ 民主対案の翌日に道筋 久間・前原両氏明かす
- ⑤ 「有事法制修正協議緊急インタビュー」
民主党 前原誠司氏「政権とる姿勢、実証した」
自民党 久間章夫氏「合意への自信、最初から」
自由、「合流」にらみ賛成
- ⑤ 小沢氏、民主に不満も
- ⑤ 共産、社民、修正案を批判
- ③⑩ 「有事法制5知事に聞く」
京都・山田知事「国民保護と一体で」
高知・橋本知事「あいまいさが残る」
鳥取・片山知事「どうする消防・県警」
千葉・堂本知事「国との権限明確に」

宮城・浅野知事「米依存に危うさも」

③① 付帯決議を評価 民放連日枝会長

③② 「廃案すべきだ」憲法研究者らが声明

5・16 ① 有事3法案が衆院通過

出席議員9割賛成

国民保護付帯決議も可決

① 「有事」を問う」上 自衛隊「守るのは国家」

①② 「シミュレーション」20XX年A国、日本への攻撃準備情報

政府・生活どう動く

その時、市民は

道路渋滞、店・銀行に殺到 通行制限区域を設定

自衛隊出勤、庭の木切る 陣地確保、事後通知も

町が後方支援拠点に 医師に業務従事命令

④ 民主、造反なし 自由との合流協議再開へ

②⑦ 「三者三論」有事法制と日本の針路

権 五埜氏「自分信じ周辺に説明を」

秋山昌廣氏「新たな脅威への議論を」

ジェームズ・プリスタップ氏「日本の成熟、同盟に新基盤」

③③ 「国家総動員法だ」「文民統制の枠組みに」

③⑩ 関西マスコミの労組も反対声明

③⑪ 「有事」総動員の鎖 3法案衆院通過

戦地で救護、強制も 武器輸送なら加害者

当事者に不安と戸惑い

5・17 ② 「「有事」を問う」中 懸念の中国、米は期待も

⑤ 有事法制3法案 参院に特別委設置

5・21 ⑤ 有事法制参院審議、論点は

基本法 与党・民主に差

対米支援 見えぬ政府対応

6・6 ① 有事法案きよう成立

④ 「私の有事法制論」上

東大東洋文化研究所所長 田中明彦氏「体系的な法整備が必要」

早大教授 水島朝穂氏「地方の『安全力』高めよ」

②⑨ 戸惑い尽きぬ有事法制 きよう参院本会議採決

自治体 イメージわからない 民放 何を要求されるの

6・7 ① 有事3法 成立

戦時体制整備、現憲法下で

国民保護は先送り 参院202対32

③ 後回しの構図 また 有事3法が成立

あいまいな適用基準 …境界いずこ

「対症療法」でつきはぎ… 目先の利益 大粹見えず

③ 緊急時制度の基礎が確立 首相が談話

③ 韓国で反発続々 右傾化懸念の声

③ 中国は反応抑制 専守防衛求める

④ 「私の有事法制論」下

元統幕議長 西元徹也氏 「テロ対応の検討も急務」

鳥取県知事 片山善博氏 「保護法制に地方の声を」

③ 弁護士 中坊公平さん 「米国追従は亡国の道」

東大教授 姜尚中さん 「外交の選択肢狭める」

③ 渦巻く抗議 怒る被爆地

「断固拒否する」

③ 民放連も声明

③ 「戦争協力」募る不安 有事3法成立

業務命令拒否できるか

「職失うのは怖い」

③ 議場冷静 あっけなく

反対発言に「仕方ないよ」

6・19
27 「有事法制 影響と課題は」

京都大教授 大嶽秀夫氏「万」の備え 評価できる」日米の役割仕分け必要

関西学院大教授 豊下梢彦「米軍支援の整備にすぎぬ」在韓邦人の救出触れず

2. 「論説」(「社説」、「コラム」)

「社説」は、与野党協議の最中の五月一二日には「独り歩きさせぬために」で、「有事法制」の必要性を認めただえで、国民の利益の保証が不十分な修正案には反対するとして、国民と国会の有事法制に対する不断の監視を主張している。修正案が大詰めにした一二日には「代とは合意に決断を」という見出しだが、その内容は、拙速な合意を戒めており、見出しとの整合性を欠いたものとなっている¹⁸。さらに、一四日の「さらに練り上げよ」では、与野党の「合意」という形式面は評価しているが、その内容の不十分なことを続けて主張している。「法案衆院通過」の翌日「使わぬ道具にするために」で、法案通過を機に乱用を危惧し、必要悪であることを強調している。あくまで、修正の内容が不十分で、参院で十分な討議をすることを一貫して論じている。

「コラム」では、記名論説は、重要な概念規定があいまいであることを示し、個別的な問題を提起している。「コラム」では少し見方を変えている。「天声人語」では、「日本の有事」は歴史的にみて「侵略」によるものであったことを示し、戦争の犠牲は審議している議員達ではないことを述べ、文民統制の概念が極めて新しいものであることから、制度への安住は危険であると警告している。すなわち、「有事法制」のありかたそのものへの問いを「社説」や他の「論説」より明確に提示している。

「法案成立」期では、「コラム」－「記名論説」－「社説」の順で登場している。法案が成立した翌日(六月七日)の社説は、「小泉首相にいますぐ考え直してもらいたい問題ができたため」(6/7②)という理由で、「自衛隊をなぜ送る」という見出しで、「イラク新法」の問題を「有事法案」より優先させている。ここにおいて「有事法制」への自らの主張を弱めてしまったという印象を与えてしまった。確かに「成立」した法案を直ちに廃案にはできないし、

各論での主張も形式化することで説得力を弱めると判断し、「戦略を転換した」と見ることもできよう。しかし、「社説」が新聞の主張の「顔」であることは変わっていないとすれば、こうした「戦略の転換」は十分には認知されず、主張の弱体化とみなされてしまうであろう。

(表3) 「有事」関連社説・論説・コラム

5・12② 〈社説〉有事法制 「独り歩きさせぬために」

5・13① 〈天声人語〉日本の「有事」は自ら招いた「有事」だった。

② 〈社説〉有事法制 「与党は合意へ決断を」

5・14② 〈社説〉有事法制 「さらに練り上げよ」

5・15② 〈編集委員 本田優〉「あいまいな、つぎはぎ法制」

5・16① 〈天声人語〉戦争になると「民」がやられる。有事審議の議員達に「民」を優先する政治理念があるか
注視しよう。

② 〈社説〉有事法制 「使わぬ道具にするために」

5・17① 〈天声人語〉文民統制の発想は日本にはなかった。制度や原則に安住するなかれ。

5・20③ 〈ポリティカにつぼん〉「日本国憲法という羅生門」

5・27② 〈ポリティカにつぼん〉「チャーチルの有事、日本の有事」

6・6① 〈天声人語〉遊軍記者による戦争の現実と外交論理の不整合

6・7② 〈政治部長 木村伊量〉「脅威論より外交構想を」

6・8② 〈社説〉「文民」の質が問われる

国民保護法制を急げ 先制攻撃論への不安 アジアに「信頼」を

3. 「投書」

「有事法制」を読者はどのようにみていたか。「声」の欄に掲載される「投書」とユーモアを含む寸評「かたえくぼ」に表現された読者意識は、「有事法案の衆院通過」時には次のように五つに分けて読み取ることができる。すなわち、「有事法制」とは何か、「法案審議およびその担い手について」「法案の影響」「戦争とは何か、戦争の経験」「有事法案への対処」である。

ところで、「有事法案の衆院通過」時は、一七日に「有事法制」の特集が組まれている。まず、与野党の「修正協議」「合意」の段階では、審議の密室化を批判する投書(5/14-1)^⑤が登場している。さらに当該法案による「自衛隊の先制攻撃の肯定」を危惧する投書(5/14-2)が掲載され、法案の通過後には「戦争加担するおしつけ」^⑥「有事法制」という理解を即座に示している。こうした「有事法制」の性格を端的にとらえたものとして、一七日の特集における「解釈改憲を超える重大事」(5/17-1)「戦争できる国」(5/17-3)、翌日の「一人より国家に重きを置く法案」(5/18-1)「人権尊重」の文言の無力さ」(5/20-1)と続く。「有事法制」の定義づけをしたこうした「投書」には肯定的なものはまったくみられない。

「法案の成立」時以降は、六月二一日の「イラク新法」特集を境に「有事法案」から「有事法制」「戦時体制への不安」にテーマが移っていく。二〇日までは、「衆院通過」時と同様、「有事法制への対処」(6/11-1,6/12-1,6/18-1,6/18-2)や「有事法案の影響」(「戦争太り」6/13-1)、「法案審議の政治家への懸念」(「翼賛国会」6/14-1)を主題とする「投書」が多い。二一日を前後して「平和の希求」(6/22-2,6/24-1,6/24-2,6/25-2)や「戦争経験」(6/26-1,6/26-2,6/26-3,6/26-4,6/26-5)が増加する。「イラク新法」による自衛隊の派遣という、具体的な戦争状態への関与が迫ってきたことに対応して、戦争経験、それと対照的な平和ないしその希求が求められたとみられる。

「法案審議の政治家への不安」も相変わらず存在する。「いらない出前」(6/22-1)「政府の独走」(6/23-1)「超党派若手の憲法観」(6/29-2)がそれに該当する。ここには、国民の意向が「法案」および審議する政治家の意識との疎外が依然として表われている。

短い語句でユーモアやウィットを表現する「かたえくぼ」は、「投書」の文章より端的に、「寸鉄人を刺す」ことができる。「声」には一日一件しか掲載されないで、絶対数は少ないが、見過ごすことのできない「投書」である。「有事法案」に関する「かたえくぼ」は二件だが、「備えてきて憂い増え——国民 小泉首相どの」(5/20)と「灯火管制手伝います——東京電力」(6/13)と「有事法案」の衆院通過、参院通過・成立にそれぞれ対応している。前者は、「備えあれば憂いなし」と有事法案の提出時に小泉首相が言ったことをもじっている。「憂い」をなくすどころか法制が実際に施行されれば、国民の自由だけでなく生命の安全すら保証できない。こうした国民と首相の認識の乖離が「憂いが増す」となった。後者は「灯火管制」といった古色蒼然たる言葉が、この夏の原発稼働停止による電力規制と重なって復活することに「鳥肌が立つ」思いがする。

(表4)「有事」関連投書(「声」「かたえくぼ」)

5・14 1 「有事」の審議 全部中継して

2 暴力許す論理 波及を恐れる

5・16 1 戦争加担する押しつけご免

5・17 「有事法制」

1 解釈改憲をも超える重大事

2 平和の将来像はつきり示せ

- 3 戦争できる国 追認するのか
4 仕方ない犠牲 首相は何思う
5 国民主権の旗 振り続けよう
- 5・18
1 人より国家に重き置く法案
1 「人権尊重」の文言の無力さ
- 5・20
2 いつの日にか「非核」放棄か
3 胸を打たれた被爆教師の声
4 戦争は怖いと感じればいい
- 「かたえくぼ」有事法案 備えてきて憂い増え——国民 小泉首相どの
- 5・22
1 歴史の溝埋め信頼こそ先決
2 平和の心抱き世界を見守る
- 6・11
1 少数派であれ憲法9条守る
- 「かたえくぼ」衣替え 終えました——自衛隊 平和憲法どの
- 6・12
1 被爆国の理念今こそ生かせ
- 6・13
1 「戦争太り」を国は望むのか
- 「かたえくぼ」有事関連法成立 灯火管制手伝います——東京電力
- 6・14
1 「翼賛国会」を国民は認めぬ
- 6・15
1 悲しく空しい有事法制の国
- 6・17
1 自衛隊脅かす新法の危うさ

- 6・18
 - 2 政府は守らぬ戦争下の国民
 - 1 海外派兵には断固反対する
 - 2 有事にさせぬ市民の力こそ
- 6・20
 - 1 イラク新法の漫画描くと
 - 2 一人で「反戦」威圧を感じた
- 6・21
 - 「イラク新法」
 - 1 派遣するなら9条の改定を
 - 2 原稿PKOで行うのが本筋
 - 1 知らない出前国会から連発
 - 2 大好きなご飯 平和の「味」も
 - 1 政府の独走に異を唱えよう
- 6・23
 - 「平和求めて」
- 6・24
 - 1 蛍の光に残る恐怖の思い出
 - 2 気迫をこめて憲法読もう
- 6・25
 - 1 自衛隊派遣で犠牲者出たら
 - 2 香月作品見て不戦の心新た
- 6・26
 - 「原爆・特攻・学徒出陣」
 - 1 家倒れ下敷き母と妹に火が
 - 2 貨車のそばで遺体を焼いた

3 枕崎近くの沖墜落の機体は

4 フィリピンで弟は海の藻屑

5 沖縄から友は帰らなかった

6・27

1 暴力の悪循環断ち切る道を

2 危険地派遣は心遣いが必要

6・28

「かたえくぼ」

筆坂議員セクハラ辞職

お互い仲良く専守防衛でいきましょう——共産党

自衛隊どの

6・29

1 また子に銃か 師の句を思う

2 超党派若手の憲法観に不安

4. 政治漫画との関連

政治漫画と文字情報（「記事」「論説」「投書」）との相互作用を見る。

「文字情報」からの作用は、上述したように、テーマ設定や「意向」ならびに「所作」のレトリックを伴って生ずる。「朝日」(03/5/14)では、三面に掲載されており「時時刻刻」の「自・民、シナリオ周到」(5/14③-1)と組み合わされた構成になっている。しかし、政治漫画には与野党の合意への水面下の過程についてテーマとはしていないので、実際にこの政治漫画のテーマ設定に関わっているのは一面の「有事法制 今国会成立へ 修正協議 与党と民主が合意」(5/14①)とみられる。したがって、「記事」による「所作」のレトリックはあまり働いていない

といえる。それに対して、「論説」との関連は「社説」に多く見られる。一二日、一三日、一四日のいずれの「社説」においても、修正案の性急さに懸念をもっている。この性急さを引き起こした原因に、与野党の秘密裡の交渉と民主党の大幅な妥協があるとしている。この指摘が、一四日の政治漫画のモチーフとして表れている。

「朝日」(03/5/15)も三面に掲載されているが、テーマに直接対応する「記事」は、五面(「自由」「合流」)にのみ賛成。小沢氏、民主に不満も「(5/15⑤)」にあって、「所作」の機能が届きにくい。「社説」との対応も、一四日の政治漫画に比べ全くないというわけではないが少ない。小沢自由党の「法案」への責任は言及されにくい。これは、前述したように小沢氏を借りた一般庶民の声の表象であるとみれば、「社説」との対応も関連が生じよう。

「朝日」(03/6/7)は、上述の政治漫画二枚に比べて、「記事」との親和性が強い。七日三面に掲載されたこの政治漫画は、「後回しの構図」(6/7③)で語られているような、「国民保護法制」への扱いの軽さを「パラシュート」の比喩で表現しているからである。

今度は、政治漫画の作用について考察してみよう。

「朝日」(03/5/14)で示されたテーマである「与野党合意の不十分さ」や「民主・自由の合流問題」には、翌日の「有事法制知事アンケート」(5/15①)に反映されている。その中で、「法整備には8割賛成」としながらも「政府の説明不十分」といった見出しを冒頭に掲げており、部分的ではあるが、「政治漫画」のテーマを、有事における自治体の自衛隊支援の問題に広げて(狭めて)変化させつつ、そのものカテゴリー化は「朝日」(03/5/14)をもとにしている。また、「低いハードル 浅い議論」(5/15③)には間接的ながら、民主党の対応の拙さを含んだ「修正合意」への認識がなされている。「朝日」(03/5/15)では、翌日の「出席議員9割賛成」(5/16①)と関連はしているが、それは観兵式の儀式性から推測できることにとどまっており、直接的なつながりは見られない。また、この二枚の政治漫画が影響を与えた「論説」はこれといって見当たらない。

「参院通過」以後の「朝日」(03/67)では、「国民保護法制」の扱いに見られる政府(および民主党を含む国会)の姿勢や、有事状況における国民について、「記事」では掲載翌日には記事そのものがほとんどなくなってしまう、影響を見る以前の問題となっている。「社説」(68②)において、「国民保護法制を急げ」という主張に関連が辛うじてみえる。また、「投書」においても、国会・政府の姿勢を問うものは「翼賛国会」「少数派であれ憲法9条守る」といった方向に関心が向けられ、必ずしも「政治漫画」のテーマを源泉としたとは言えない。ただし、戦争状態になったとき国民がどうなるかという描写(6/17-2,6/24-1,6/26-1,5)のなかに、きわめて受動的な存在としてしか扱われないことが読み取られ、その萌芽がこの漫画に表れているという解釈をすれば関連が生じる。

Ⅲ 結論と課題

「政治漫画」にみる「有事関連法案」のイメージは、「与野党合意、修正」の不透明性、「既定路線の結果としての儀礼の一つ」、「国民保護法制への疑問からの曖昧性」であり、法制度そのもののへの了解とともに国民不在の議論に対する不安を示していた。これらは、掲載面の「記事」との直接の関連は見られないが、解説や特集とのかかわりを有していた。むしろ「論説」が「政治漫画」のテーマや意図の裏付けとなっていた。また、「投書」は「政治漫画」とは独自の立場を構成していた。ここから、「有事法制」に関する「政治漫画」は、「解説」よりも「評論」の性格——「説得」の機能——が、他の文字情報との関係から明らかになった。

課題としては、受け手研究への展開がまず指摘される。Ⅰ章で示した「政治漫画」の「一見さんお断り」性(閉塞性)を本論では克服することができなかった。多様化しているように見える受け手は「政治漫画」の読み取り結果をどのように受け取っているかを検討することから、この閉鎖性を解消することができらるだろう。

註

次に、「政治漫画」の認識をミクロ的に考察する必要がある。「政治漫画」とともに新聞紙面を構成する「記事」「論説」「投書」が、「統合版」と「最終版」では異なる場合があるからである。たとえば、五月一四日の「社説」は、「統合版」では「さらに練り上げよ」という見出しであるのに対し、「最終版」では「修正はまだ足りない」となっている。また、五月一五日の「政治漫画」掲載面の「記事」では、「統合版」では「低いハードル 浅い議論」「人権」「今後の歯止め」「自衛隊法議論深まらず」となっているが、「最終版」では「修正に課題と成果」「自衛隊の権限先行」「人権明記、歯止め」という見出しに替えられている。「社説」も「記事」も「記事」に含まれた「成果」の表現をみると、はたして言い換えですむかどうか疑わしい。さらに、「政治漫画」の認識を、新聞メディア全体としての認知を前提としたものとすれば、「統合版」と「最終版」の情報の違いは、少なからずそれらを受け取る地域——「中央」と「地方」——の読者の認識に差異を生じさせるであろう。

(1) 新聞表記を「朝日」「毎日」「読売」と略記する。また、政治漫画の表記については、本文では、「朝日」(03/5/14)のように、「新聞略記名」(掲載年——西暦——月/日)と表わす。また、記事表記は(日付、掲載面)で表わす。

(2) ただし、「読売」(03/5/8)は厳密には「有事関連法案における民主党の修正案」と「自由党との合併問題」の二つのテーマが含まれている政治漫画である。「有事修正案」作成中の菅代表のところに花束を持ってハートマークの目をした小沢一郎自由党党首がドア(「お返事は「有事」の後」という張り紙をした)を開けて入ってくる政治漫画である。人物配置や相互の構成から「自由党と民主党の合併問題」が主となっているように見える。しかし、憲法改正なき自衛隊の「国軍化」は、小沢氏の主張とは相容れない姿勢であり、こうした内容を含む法案に民主党が賛意を示したことの結果として「民主菅代表(自由党との)合流、当面

見送る意向」(「読売」03/5/08)となった。こうした事実関係から、「有事関連法案」をテーマとする政治漫画に「読売」(03/5/8)を含めた。

(3) もっとも、会期通じて描かれるテーマはあまり見られず、各政治漫画の背景として描かれるきわめて紋切り型なものとして描かれることが多い。長期的に描かれる政治漫画のテーマは、登場する人物のパーソナリティーを介在して描かれることがある。政治漫画が政権研究に用いられるゆえんでもある。

(4) 「民主・自由」「合流」問題」が、「有事関連法案の与野党合意」に準じてテーマとして取り上げられたことは、「表現形式」における、対象の配置の差からも推測できる。小泉・管が画像中央で、大きめに描かれているのに対して、小沢は左上方すみでしかも小泉・管に比べて心持ち小さく描かれている。重要テーマは画像の中心に位置することが多いことを考えると、「合流問題」と「有事関連法案」との間に重要度において差異があったとみることができる。

(5) 政治家それ自体が特徴のない顔をしているだけでなく、その行動・発言にも国民に関心がもたれないとすれば、この点が必ずしも政治漫画自体の認知に作用しない場合がある。与野党の党首ないし政府閣僚の顔全てが、読者に認知されているかどうかを想像してみるとよい。どこまでが認識されるかということも、政治意識を図る手掛かりとなるとともに、「逆に」政治漫画の「自己閉塞性」(ワカルヒトニシカワカラナイ)を測ることにともなりうる。

(6) 「対決」の構図は、一四日付けの政治漫画で辛うじてあったにもかかわらず、一五日のものでは完全に消えている。これは、一四日の政治漫画に生じていた諦観が、翌日のそれで最大限に達したとみることもできよう。

(7) 後述する記事・論説と政治漫画との関連をみることで明らかにしよう。

(8) 「お客様」という表現もここでは適切ではない。では、主体は？あるいは保護されるべき「真の客体は？」といったことにも読みを馳せることができよう。

(9) こうした作品の一貫性は、この時期の作画担当が同一人物(針すなお氏)であったことにも起因すると思われる。多様な引出しを漫画家個人として有しているとはいえず、作品にはその漫画家の個性が共通点として表われる(いわゆる「漫画家」論、文学の作風研究に関連する領域である)。それがどのように表われるかは今後の課題としたい。

(10) 引用の都合上、「読売」と「毎日」の政治漫画は図として表記できなかった。そのため、説明が長くなった。画像内容をどのようなメディアで伝えるかは永遠の問題である。

- (11) 「読売」(03/5/14)。管・小泉両氏の「有事法案」の持ち方からみると、この政治漫画の構図では、ふたりとも喪服を着て、有事法案という棺を送り出しているようにみえてしまう。こうした解釈の際に根拠となる、政治漫画にひそむ「意向」の技法はよくわからない。
- (12) バスの乗車券（乗車票）は降車時に現金とともに投函するものである。乗車時であれば発券機から出てくる乗車券（乗車票）を受け取るはずである。いずれにしても、投票の比喩にはあまりそぐわないのではないか。（「読売」03/5/15）参照。また、衆院通過当日のため、「参院行」のバスはまだ発車していない。
- (13) もつとも、一五、一六日の政治漫画を別個に読んでもそれ自体完結するものとして作られてはいる。
- (14) 「諦観」も関心の結果と見ればそうなる。
- (15) これ以上の量的比較をより厳密に行うには、コラムセンチ法を用いた面積の測定と、新聞読者に対する新聞講読傾向を調査して、記事登場面に重みをつけて比較する必要がある。そうすることによって、新聞紙面における「有事関連法案」記事の重要度が推測できる。
- (16) 新聞「休刊日」は印刷をしない日とされており、新聞が実際に配達されないのは「休刊日」の翌日になる。おおむね一ヶ月に一日「休刊日」が設定されている。二〇〇三年の五月と六月の「休刊日」翌日は、五月六日（火）、六月九日（月）であった。「休刊日」翌日の「新聞報道」について（適切な時期に）報道されない政治情報」および「中央と地方の情報格差」という点から、検討する余地はまだあると思われる。
- (17) 「すでに」というよりも別の意味で「既に（終わったこと）」であろう。「有事関連法案」に対する「朝日」の反応の鈍さは様々などところで指摘されている。たとえば、五月一四日の社会面（26面）「論点素通り不安の波」で、民主党が提起したはずの論点（国民の私権制限）「自衛隊の運用」「米軍支援」の三点が、自民はともかく民主も修正点では言及していないことに触れている。しかし、こうした点はもつと早いうちに特集なり「論説」なりで明らかにすべきであった。
- (18) この不整合の理由は不明である。後述するように、社説の見出しを巡り「統合版」と「東京最終版」が異なっている場合がある。このことと関連があるのかもしれない。
- (19) 「投書」の表記は（掲載月日、掲載番号）とした。「掲載番号」は、掲載位置が「声」欄の右上部に近い「投書」を1として、同じ高さで中央2、左3と進み、以下下に行くに従って4、5とつけた。

参考文献

- Edelman, Murray J., (1964) *The symbolic uses of politics Urbana*:University of Illinois Press.
- Harrison Randall (1981) *The cartoon :communication to the quick*, Sage Publications.
- 茨木正治 (一九九七) 『政治漫画』の政治分析』(芦書房)。
- 荻部 直 (二〇〇三) 『裏社会に向かう心理』(『読売新聞』二〇〇三年八月二十一日夕刊)。
- Medhurst, Martin & M. Desousa (1981) 'Political cartoons as rhetorical form: a taxonomy of graphic discourse', *Communication Monographs*, 48 (3) ,197-236.
- 中村政則 (二〇〇三) 『日本の近現代史を再考する——アメリカの日本研究との対話』(アンドルー・ゴードンとの対談) (『世界』二〇〇三年九月号)
- Smith, L. Henry, (1954) 'The rise and fall of political cartoon', *Saturday Review* May 29.
- Streicher, L. (1967) 'Elements of theory of caricature', *Comparative Studies in Society And History*, 9, 427-445.

（表1）「政治漫画」の理論的背景

背景となる理論	特徴・性質	政治漫画との関連
利用と満足の研究	メディア利用の動機を探索 能動的受け手像 機能主義	欲求不充足 欲求のレベル～文字と画像 欲求の操作：隠蔽と暴露 方法論：自由回答とその分析
議題設定機能研究	メディアの争点認知が受け手の 争点認知に影響する。 認知から態度研究へ 諸理論との接続	伝達テーマと内容 文字情報との関連 送り手の認識枠：新聞社の認識 ～雑誌漫画との比較
属性型 議題設定機能研究	地位付与・現実構成・送り手研 究・利用と満足 一般争点の下位争点に着目 争点の属性分布強調～属性への 感情・評価に影響	テーマとその象徴化 テーマの構造把握 文字情報との関連 送り手の認識枠：新聞社の認識 ～雑誌漫画との比較
「現実の構成」論	現実社会的に構成されている メディアが構成した現実の把握 客観的現実・メディア的現実・ 個人の主観的現実との相互関係 マス・コミュニケーションの 「送り手」	読み手・送り手の背景、時代状 況の把握 「主流」への同調・逸脱 送り手内の関連：漫画家と編集者 組織における個人「社会化」 「現実の鏡」：世論の反映・社 会の縮図
「批判学派」の理論	「受け手」・「メディア」に関わる コミュニケーションの社会的構造 （コンテキスト）の把握 支配的価値に基づく状況規定 メディア＝実践の意味表示機関 ～自然な形で支配的価値表出 受け手から読み手へ～受け手の 相対的自律性 「政治コミュニケーション」と権力	支配的価値の浸透 政治漫画と記事・論説の比較 政治漫画内の修辞、主題設定 他の新聞・メディアとの比較 政治漫画の市民像 ステレオタイプ表現とイデオロギー 「神聖、不可侵」の存在
フレーミング研究	環境認知の枠組み 受け手過程～社会心理学的 送り手過程～社会学的接近 「過程モデル」 フレーム分析～物語＝ニュース ～政治的シニズム	テーマ・シンボルの分析とその 相互関係～メディア・受け手フ レームの発見 実証・計量化の問題 「政治漫画」の笑いとしニズム
象徴的収斂理論	シンボルによる意識の統合過程 研究 ファンタジー：テーマ・タイプ レトリカル・ビジョンの構造	レトリックと説得